はっきり話そうとする子

―書きことばの学習を中心として―

石　井　真理子

1. はじめに

一般的にダウン症児は言葉が不明瞭でわかりにくい。Y子の場合もそうである。自分の行動・思い・感情を意欲的に人に伝えようとするが、耳慣れない人やY子と共通の場にいなかった時にはY子の思いが伝わらないことが数多くある。そのようなY子との取り組みについて述べてみたい。

2. 対象児の実態

Y．N（昭和53年5月25日生、女）

ダウン症

○話すこと

・問いかけに応じ、単語や文で応答できる。

・大変早口、ほとんど口唇を動かさないで口の中で言っていることがよくある。特に話したいという気持が強いほど早くなる。聞きとれた単語で推察するが、共通の場にいなかったときは分らないことがある。文が長くなるほどわかりにくい。

・言っていることが理解できない場合「もう一度言ってみて。」と言い直させるが、同じ様な言い方で繰り返すか「もういい。」といってあきらめてしまう。言い直させることはこの段階ではほとんどその効果がみられない。

・「なつのぼうし」というような修飾語をつけることができ、冬の厚い帽子と比べたむぎわらで作った帽子を区別して表現できる。

○読むこと・書くこと

・昨年4月に1年生に入学したときは、自分の名前をなぞり書きしているような段階であったが、1年間で清音・濁音・半濁音・数字の読み書きがほぼできるようになった。（「ち」と「つ」の読みが混同しやすい。ね・わ・れが書きにくい。）

・5月の生活単元「すいはん遠足」の学習で、カレーライスの材料を書いた。そのときの表記は、

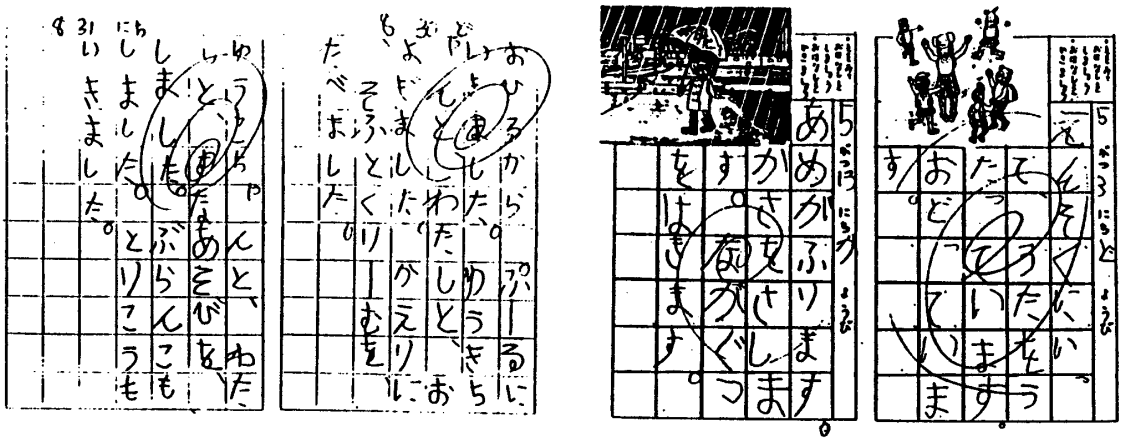
たまなき（玉ねぎ）　じゃがいいも（じゃがいも）　にじん（にんじん）　ぶたにく（ぶたにく）

とした。音を誤って覚えている部分もあるが、発音をそのまま表記するのは、まだむずかしい。

・物語などの音読は、一字ずつのひろい読みで

ある。

・毎日半頁ずつの日記には、遊んだことや家でしたことを書き、宿題で絵を見ながら文づくりをしている。これは家の人と毎日続けている。



3. 取り組みの構想

(1) 研究仮説

言葉には二つの型がある。「話しことば」と「書きことば」である。子どもたちは耳から入ってきた言葉を覚えやがてそれを使うことによって話しことばを獲得していく。そのうちに文字に関心を持ち読み方を覚え書くことができるようになって書きことばを獲得していくという順序を追う。つまり、話しことばは書きことばの基礎である。

本児の場合、豊かな語彙を持っていて、日常生活の会話では聞き取りにくいながらも比較的自由にことばを使っている。そこで、ことばの発音の誤りを指摘して訂正させたりゆっくりと言い直させたりすることに主眼をおいて指導し本児の話す意欲を失わせるより、習得されつつある書きことばを学習することでより正しいことばを身につけていくことはできないだろうかと考えた。ことばの表記を学習することによって文字と音とが対応しているという意識を持たせることができ、その結果としてことばを音の合成としてとらえはっきりと発音できるのではないかと考え、ことばの表記を中心として学習していくことにした。

(2) 指導の方針

① 個別の指導では、まず促音・拗音の表記と音との対応を指導していく。

② 既習の清音・濁音でも定着していないものもあるので繰り返しを重視して指導していく。

③ 日常の生活の中では、本児の話を聞くことに努め、話そうとする意欲を育てていく。

④ 語彙を増やす・心を育てるために読書を取り入れる。特に音読を重視する。

4. 指導実践例

(1) 「ちゃ」の指導

4月の最初の個別指導で物語の読み聞かせ、Y子の音読をしながら、題名の中にある「ちゃ」を取り出して指導していった。遊びの中で少しずつ学習を取り入れていくという形を取りながら「ちゃ」の入った単語（おもちゃ、ちゃわん、おちゃなど）を読んだり書いたりしていった。

4月の終わりには読むことができ始めたが書くことはできなかった。引き続き他の学習と平行しながら定着を図っていった。毎日書いている日記には「～ちゃんと遊んだ。」という記述が多く、9月に入ると自分で書くことができ始めた。

(2) 「っ」の指導

5月 促音の指導に入る。「こっぷ」という単語を選び「っ」の口形が口を閉じ声を出さないこととを指導する。「っ」を文中に見つけると口を閉じて動作する。しかし、単語としては読めず、「こ」「っ」「ぷ」と1字ずつの拾い読みであった。箱の中の「っ」を含んだ単語カードを1枚ずつとり出して読むという遊びを繰り返しながら定着を図っていった。

7月 たなばた発表会があり、Y子はクラスの出し物で「ももたろう」の劇に取り組み、ももたろうを演じた。その中に「きびだんごを持っておにがしまにいこう。」というせりふがあったが、「もって」の促音は意識できず、早口で聞きとりにくかった。何度か注意したが直らなかった。

夏休み 家でひらがなばかりの読み物「いっきゅうさん」を毎日音読し、家庭訪問のとき、読み聞かせてくれた。文として比較的すらすら読めていたのに驚いた。毎日日記も続けた。

9月 7月にした劇「ももたろう」を全校の生徒児童集会で発表することになり練習を始めた。7月にした劇ということで自信を持って臨むことができた。大きな声でせりふを言い、7月にうまく言えなかった「もって」もゆっくり、はっきり言うことができた。5月からの学習がここでY子の中で組み立てられて意識され、せりふの中に表われたと思われた。

9月の児童生徒集会でももたろうを演ずるY子

(3) 話づくり

きゅうしょく・がっこう、きょうなどのことばが入った絵カードを作り、絵を見て話を作ったり書いたりする。

以上のような実践に加えて、物語の読み聞かせ・音読、交互に読み手となってのかるた取りなど遊びを加えた学習を行ってきた。

5. 考察と反省

「こっぷ」と正しく書くためには、

①この単語の中に「っ」という音が含まれていること。

②その音の表わし方は「っ」と書くこと。

がはっきりと把握できていなければならない。文字や文を書くとき我々はその作業を頭の中で繰り返している。「っ」が書けるようになる過程で正しく発音し書くという作業を、始めは意識させながら、そしてだんだん無意識のうちにしていかなければならないが、長い時間と経験が必要である。

劇のせりふや選び出したことばがはっきり言えるようになったのは、練習による繰り返しで意識して話せだしたと考えられる。しかし、話をするとき、一つ一つのことばを文字化したりはしない。Y子の話すことが文字ばかりの指導でスムーズに表現されていくとは考えられなくなった。文字の指導をしたり、時々は話を文字化する一方で、Y子の話し方を早口のくせととらえてゆっくり話すことも指導していかなければならない。しかし、始めにも書いているように話す意欲を失なわせないように十分配慮していかなければならない。

実践例(3)で絵カードを見ながら話すときは早口でわかりにくいが、文字カードでは1つ1つていねいに読める、文字カードをゆっくり話すことの指導に補助的に使うことは有効であった。

6. 今後の課題

Y子の話がわかりにくいのは、ダウン症のY子の持つ口腔周辺の筋力などの問題もあると思われる。単にことばだけにとらわれず、口の体操などを取り入れた学習も考えていかなければならないだろう。また、誤って覚えている言葉もある。正しく聞き取る訓練、まちがって覚えていることばの訂正も必要である。

最近、音読の必要性をよく耳にするが、正しい口形で話そうとすること、大きな声を出すことなどができる音読はY子にとって有効と考えられる。短時間でも毎日続けるようなやり方で習慣づけていきたい。

全く意味が通じない話を二度三度繰り返させても同じことの繰り返しである。繰り返しや言い直しをさせるのは、言っていることは分かるが聞きとりにくいことばでなければならないと考える。Y子の心情をより理解していくことが必要である。そのためにY子と同じ体験を多くしたり、家庭との連絡を密にすることが大切である。